

# アイヌの動物変身譚における「第3の変身」について

北原 次郎太

はじめに

アイヌの宗教文化研究においては、初期の段階から日常の語り（民俗例）と文学資料を併用してきた。今後は文学への依拠が強まること予想されるので、双方の背景にある世界観が必ずしも一致せず、しばしば矛盾することに改めて注意しておきたい。

知里真志保は「アイヌ語法概説」の中で名詞の性に関連し「神話に於て或種の動物又は無生物が擬人化されてとる性は習慣に依つて一定している」と述べた。知里が例示するカラスやカケスなどは、生活誌においては雌雄いずれも認識されているが、文学中では概して「伯父」や「男」など特定の性別で登場する傾向がある。こうした民俗例と文学のズレは、今後の世界観や神觀念の研究を展開するに先だつて検討する必要があると筆者は考えてきた。その一環として本誌40号では、*utsu*（シャマン儀礼）について取り上げ、民俗例で語られるシャマンの人格交替や忘失が、文学においては見られないことを指摘した。

本稿では、動物変身譚に見られる3タイプの変身に注目し、動物神の「変身」について民俗例と文学がどの程度リンクしているかを検討する。

小澤俊夫（一九九四）の指摘によれば、アラスカ先住民など北方民族の婚姻譚においては、あたかも人間が動物の一種のように位置づけられ、そうした認識の上で語られる人と両者の婚姻は、異類婚というよりもむしろ同類婚的だという。また、日本の昔話に見られる動物認識も、動物から人間への変身が特に原理的説明を要さず自然に起こるという点で、北方を含めた非キリスト教圏の諸民族と共通するものだという。

中村禎里（二〇〇六）も、北方民族の世界では人と動物の世界が明瞭でないこと、また、グリム童話集の中に動物から人への変身譚がほとんど見られない（変身の事例は、魔法によって動物にされていた人が本来の姿に戻るケースにはほぼ限定される）ことを指摘している。そしてヨーロッパ（キリスト教圏）の昔話には、動物と人の強い断絶が感じられ、動物が人の領域へ侵

入することに對しより強い拒絶が見られると述べた。一方、人が動物に変身して動物と婚姻する事例は日本・ヨーロッパともに皆無であり、その点では共通性があるとも述べている。

小澤や中村が指摘する、非キリスト教圏の昔話における人と動物の近さや、その一方で動物との婚姻に對する拒絶感情があるという点は、アイヌの文学にも認められる。アイヌ文学でも、動物と人の変身がよく自然に、また頻繁に起るのである。

本稿では、こうした変身譚において、動物と人の姿のどちらが本質とされているかに注目してみたい。朝鮮半島や日本では「へび婿」や「ツル女房」のように「動物が一時的に人間に変身して来訪する」ケースが優勢である。これに對し、アイヌや他の北方民族には「本来人と同じ姿をしている動物達が、それぞれの特性に應じて動物の姿に変身して来訪する」という認識がある。狩猟等による人と動物の接触は、動物神の一時的な変身と訪問の結果とされ、霊送り儀礼等の論理や神界のイメージもこれを基盤として構築されている。ところが、アイヌの文学には、動物としての姿を本質とするかのような話がしばしば見られる。

## 一・変身の3類型

前節で述べた「人の姿をした神から動物への変身」を第1の変身、「人から動物への変身」を第2の変身とする。さらに萩原(二〇一六)には、動物が人に変身する第3の変身についての指摘がある。

第1の変身 神(人の姿) ↓衣・冑の着用 ↓動物  
第2の変身 人 ↓動物  
第3の変身 動物 ↓人

第1の変身は、人の姿をした神が動物に変身するもので、動物神が着物や冑をまとうことでおこる。着物は動物の肉体となり、人への土産として人間界に残される。次の散文説話は第1の変身の一例である。

### 「木彫りのオオカミ」

クマの主宰神の息子である若いクマが、石狩の中流に住む女性に惚れて妻にしようとする。舅を操って女性を山の中に置き去りにさせ、襲って魂を奪おうとするが、女性が護符にしていた木彫りのオオカミのために思うようにならない。そうするうちに下流から来た男がクマを退治した。クマは夢に現れて謝罪し、自分を祭ってくれるように、また神界に戻れるように祈って欲しいと懇願した。人々は謝罪を聞き入れ、そのクマを送るとともに、クマの主宰神に向って、若クマを許すよう祈った。後日、若クマは再び夢に現れ、感謝を述べて、以後人々を守ることを誓った。(平取町上貫気別 アイヌ民族博物館3298)

本篇を小澤(一九九四)にならって図化した(図1)。クマ神は、人間と接触する場面ではクマの姿(図中の……)になり、人の姿(図中の——)をとるのは夢の中のみである。クマ神を送る場面では、

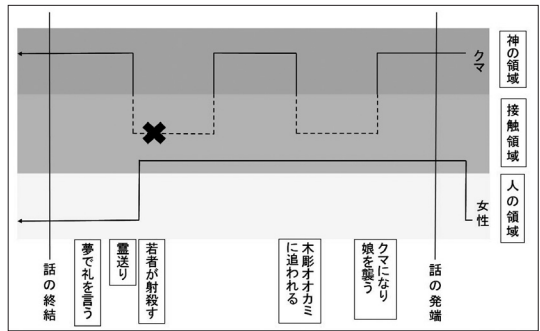
神は神の世界で伴侶を見つけるべきことを論じており、動物が越境する事へのけん制・拒絶がうかがえる。

これに対し、第2の変身は、人が動物神の力によってその動物の姿に変えられ、その世界へ引き込まれる話型に多い。また、魔物の呪いで（単なる加害として）動物に変えられてしまう例、不心得者が一種の罰として動物に変えられる例もある。次の散文説話は、動物の世界に引き込まれ、伴侶とされた例である。

「二人で交易に行つて悪神にアリにされてしまった弟の話」

老父母を養っていた兄弟の弟が、船で交易に出かけたまま戻らない。兄が探しに行くと大きな岩山のおもとに弟の船が見える。岩山の上には大きな家があり、アリの行列が中に入っている。列の最後にいたアリが「船が打ち上げられてこの家へ引き寄せられた。中には老夫婦と娘がいた。彼らは天から降ろされた大アリで、天界にちよつど良い婿がいなかったため私が目を付けられて娘婿（アリ）にされてしまった。兄さんもアリにさ

図1 木彫りのオオカミ (人の姿—動物の姿……)



れてしまうから逃げてくれ」と告げた。

(新ひだか町静内 アイヌ民族博物館 34119/ 30006)

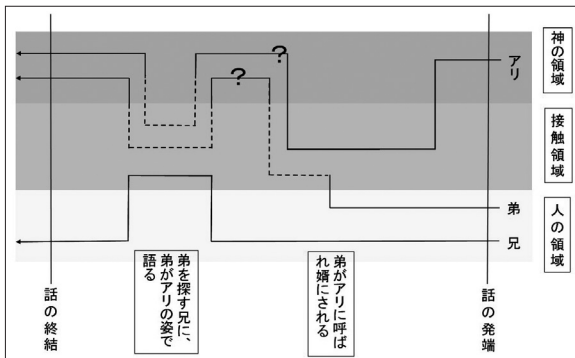
大アリの本来の姿は、やはり人の形（老夫婦と娘）である。そこに強引に引き入れられた弟も人と同じ姿をしているはずであるが、兄と対面する場面ではアリの姿になっている（図2）。先の話と同じように、動物の世界は表層の「動物の姿でいる世界」と、人の目からは隠された「人の姿でいる世界」の二層が重なったように描かれ、人の領域に留まっている者の目には表層の世界（動物の姿）しか見えないとされることが多い。この話で、弟がアリ達の本来の姿を目にしたのは、このとき既にその世界に引き込まれていたためだろうか。

第3の変身では、神（人の姿）が動物へ姿を変えた後に、再び神（人）の姿になる。

「馬の神に言い寄られた奥さんの話」

ある夫婦の所へ現れた神のような男が、そ

図2 アリにされた弟 (人の姿—動物の姿……)



のまま夫婦の家に居つき、夫の狩を手伝う。男はよく働き、夫婦に氣にいられる。あるとき夫だけが狩にいき、男は家に残った。男は人妻に言い寄ったため、妻は逃げ出した。男はウマの姿になって妻を追い、妻も逃げているうちにウマの姿になっていた。ウマに追われて山頂に行くと、そこにはメスウマの群れがいた。それはあちこちの村からさらわれてきた娘たちだった。翌日夫が後を追ったが、妻は「もう人間の姿には戻れないから、自分のこととはあきらめて後添えをもらおうように」と告げて去った。

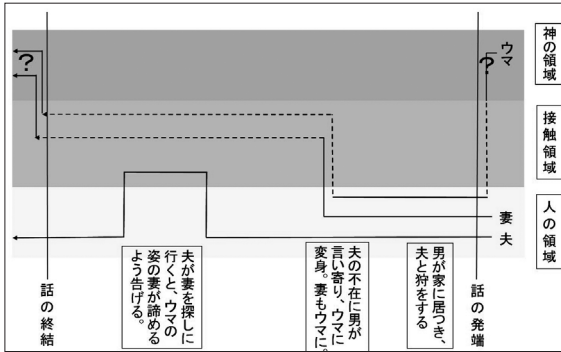
(北海道南部新ひだか町静内 アイヌ民族博物館 3417AB)

冒頭で神のような男

として現れた者は、実はウマが変身した姿であった。やがて男はウマの姿になって人妻を追い、その力によって妻もウマにされてしまう。先のアリにされた話と同様に、このウマも神界では人の姿をしていると推測することもできるが、作中では明確には語られない。

第3の変身が起こる話型としては、こうし

図3 ウマにされた妻 (人の姿—動物の姿……)



た異類婚譚のほか孤兒養育譚や古器物放浪譚の一群がある。孤兒養育譚は、孤兒を育てていた神が、成長した子に別れを告げ本来の姿に戻って去るというものの、古器物放浪譚は霊送りをせずに放置された器物が人の姿でさまよい、正体を言い当てられると器物に戻るというものである。稲田・小澤(一九八九)からいくつかの例を拾った(表1・2)。これらでは動物神に限らず、植物神や物神も変身する。

表1 第3の変身を含む孤兒養育譚 稲田・小澤(一九八九)より

頁	話型	変身者	ジャンル	地域
154	孤兒養育(争)	白	散文	旭川市近文
154	孤兒養育(争)	白	散文	白老町
155	孤兒養育(争)	カッコウ	神話	新ひだか町静内
155	孤兒養育(争)	カッコウ	神話	新ひだか町静内
223	孤兒養育(争)	とりかぶと	散文	旭川市近文
223	孤兒養育(争)	白鳥		北海道
223	孤兒養育(動物嫁(争))	白鳥		北海道
223	孤兒養育(争)	白鳥		北海道
223	孤兒養育(争)	かけす		北海道
224	孤兒養育(争)	ねずみ		北海道
224	孤兒養育(争)	オオカミ	散文	鶴居村
224	孤兒養育(争)	ツル		鶴居村
224	孤兒養育	キジバト・カッコウ		宗谷
225	孤兒養育(争)	カケス		帯広市
225	孤兒養育(争※魔)	セミ		本別町
226	孤兒養育(争)	セミ		帯広市
226	孤兒養育(争)	カッコウ・ツツドリ		新ひだか町静内
811	動物嫁	かつこう	散文	様似町
224	孤兒養育(争)	ツル		鶴居村
224	孤兒養育(争)	ツル		鶴居村

表2 第3の変身を含む古器物変身譚 福田・小澤(一九八九)より

頁	変身者	ジャンル	地域
476	造船時の木くす		新ひだか町静内
477	人文神が捨てた船材	神話	沙流郡門別町
477	トンコリ(五弦琴)	散文	樺太西海岸来知志
115	人文神が捨てた船材	神話	石狩川中流

萩原(二〇一六)は、恋愛・婚姻を主題とする動物の変身は神話では起こらない、その理由は「動物を主とする自然界と人間とのかわりの在りようを説く道徳律」が神話のテーマであるためだとする。

中村とも子(二〇一〇)は、第1の変身を指して「これは日本の動物嫁や動物婚の『変身』と逆転している点」だと述べる。中村によれば、日本の昔話に見る動物の変身は、アイヌの事例とは逆に、動物が一時的に人に変身する第三の変身に該当する例が多く「動物の外見が本質を現しており、「ヒト」と同じ魂が毛皮のなかに存在しているという観念がない」という。また、動物嫁は、人の姿になって婚姻生活を持つことが多く、それに対して動物婚(特にサル・イノシシ)は必ずしも変身をとまわず、しばしば動物の姿のまま婚姻することもあるのだという。

第2の変身に当たる例として、ヘビと共生する娘がヘビに変身するといった話が、多少ではあるが日本でも見られるという。日本の昔話(特に動物嫁)と同様、アイヌの物語でも、共生する条件として「同じ姿になる」ことが重要であり、それが満たされない時には婚姻関係が成立しない傾向が指摘できるだろう

。また、動物嫁と動物婚では、生活からの距離その他のカテグリー(家畜・食用・野生)において属するグループが異なり、いずれの場合も正体が露見すると、死か別離が待つてるといふ。アイヌの場合、動物嫁と動物婚の間にこうした層の違いがあるかについてはなお検討を要するが、正体の露見が死か別離に結びつくのは同様である。

## 二・第3の変身を含む問題

このように、動物の変身に関して、アイヌと日本には大きな相違が見られるものの、特に第3の変身については両者に共通性が見られる。先に述べた様に、霊送りなどに見られるアイヌの動物観は、毛皮や羽根(衣服・胃)の内にある人としての姿を動物の本質とする解釈に立っている。それに対して、第3の変身が起こる話型では、人への変身が解けて動物の姿に戻る場面が物語のクライマックスとなっており、その動物の姿こそが「本性」であるかのように語られることが多い。そして、そのような話型はキツネの話に集中しているように見える。北海道南部日高地方平取町の例を挙げる。

### 「神話44 懸巢の自叙」

カケスの妹が半神半人の豪傑と許嫁の仲にあった。やがてカケス娘が身支度をして許嫁のもとへ向かうと、その途上でみすばらしい女(キツネ)に呼び止められ、姿を取り変えられてし

まう。キツネはカケス娘に成りすまして嫁ごうとするが、許嫁に見破られ、折檻されて獣の姿を現し殺される。カケスの娘は元の姿(美女)に戻って幸福に暮らす。

(北海道南部平取町荷葉 久保寺(1977))

前半、カケスの妹が許嫁の許に向かう場面に妖女(キツネ)が表れる。問題は死んだキツネが獣としての姿に戻る点である。語り手はカケスの女神であり、許嫁も半神半人の豪傑なので、本篇は神の領域を舞台に展開していることになる。とすれば、キツネの女も一貫して人の姿をしていて良いはずだが、あたかも動物としてのキツネの姿が本質であるかのように描かれている。

なお、本篇は神界を舞台としている点で、動物が人に化けてやってくるという他の動物変身譚のパターンとは異なる構成を持つ。しかし、次の類話を見れば、やはり動物変身譚の変種であることがわかる。

「山姥の嫁入」

サンナイベツ村に暮らす娘が、姉に言われて山へ用足しに行き、山姥の家に迷い込む。この山姥とは先祖からの因縁があり、家を知られたために襲撃を受ける。山姥は姉を殺して着物を取り換え、姉になります。妹も山姥の着物を着せられ山姥の姿にされる。その後、姉の許嫁兄弟の家に呼ばれ、そこで山姥の正体が露見して退治される。死体は貝や海藻に化生した。

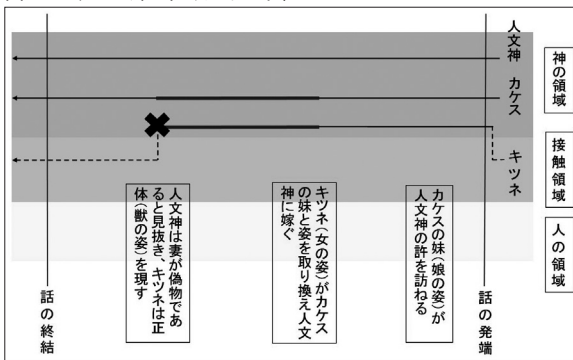
(樺太西海岸多蘭泊 散文説話 知里(1973b))

この二篇は、どちらもヒロインが妖女に姿を奪われ、正体露見の場面ではヒロインが踊りかケが出ると、何も出ないなど、大変似通った内容を持っている。また、ヒロインは居所の違いはあれど人の姿が常態であり、妖女は山野から現れる。つまり、この二篇は「人の姿の者が暮らす世界に、異界から妖女が侵入する」という共通の構造を持つ。なおかつ妖女が死後にキツネに変じる点を見ても、神謡44(舞台が神界であることを除き)動物変身譚の基本的な要素を持っていると言えるのである。

こうしたキツネの描かれ方は、霊送りの観念と矛盾するばかりでなく、他の神の振る舞いと比べても異質である。しかし、こうした伝承は樺太から北海道まで地理的にも広く分布し、例外的なものとは言えない。

次にキツネに関する民俗例と文学の例を概観する。またタヌキ、

図4 カケスの妹に化けたキツネ(人の姿——動物の姿……入れ替り——)



へびの伝承についても  
 合せて取り上げ、それ  
 らとの比較によってキ  
 ツネの特性を検討する  
 ことにする。

### 三．キツネの伝承

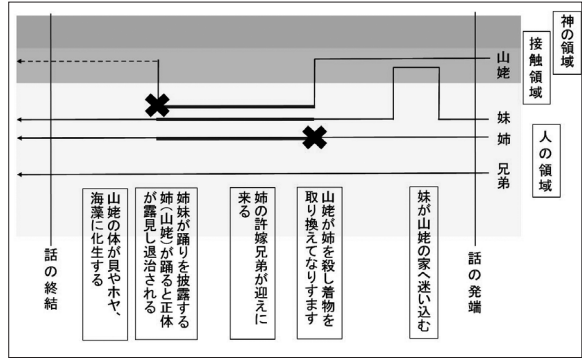
#### 民俗例

ここでは更科（一  
 九七六）に依拠しつ  
 つ、キツネを祭神とす  
 る例、シラツキカムイ  
 （頭骨を守護神とする  
 もの）とする例、キツ  
 ネの霊送りの順に見て  
 行く。なお、伝承の記録地は現行の町村名に改めた。アイヌ語  
 の表記は原資料のままとした。

#### ①祭神としてのキツネ

伝統的な家屋の背後には祭壇が立てられ、ここには恒常的に祭  
 る神々のイナウが並ぶ。祭神としては水や森林の神、太陽神に加  
 え、クマ、シマフクロウ、カケス、ミソサザイ、シャチ、竜神の  
 ほか、キツネが祭られることがある。祭神としてのキツネは、山

図5 山姥の嫁入（人の姿——入れ替り——動物に化生……）



や岬などその地域の特定の地点に住まうとされることが多く、名  
 称も固有名詞的である。これに対し、後述する霊送りの場合、対  
 象はそのとき狩猟で得た、不特定のキツネである。この点で、祭  
 壇の祭神と狩猟対象としてのキツネはやや性質が異なる。

更科によれば、キツネを祭壇に祭る例は北海道の南西部に多  
 く、東北部では見られないという。以下に具体例を引用する。

八雲町…遊楽部岳に白キツネが住み時化のとき船を守る

虻田町…村の背後と村の肩の上に2匹のキツネ神がいる

むかわ町…海岸のムレトイの丘で、キツネが忙しく鳴くと火  
 難、ゆつくり鳴くと流行病の予兆である

むかわ町穂別…カッケンの沢に住むキツネは、凶漁を救い危  
 険から守る

平取町荷負・貫気別・長知内…キツネの住む山をチノミシリ  
 （聖山）とする

新冠町…黒キツネは老人を救い、津波を知らせる（祭壇でさ  
 わぐと津波の知らせ）

新ひだか町静内…海岸のチノミシリに住むキツネが、漁の豊  
 凶や危険を知らせる

新ひだか町三石…キツネがパワーパワーと鳴いて川を下ると  
 大水が出る

浦河町荻伏…キツネはカムイシリ（神岳）で川の流れを監視  
 する

旭川市…六つの喉を持ったキツネ神が外敵や病魔を防いでくれた

② シラツキカムイとしてのキツネ

鳥類やカメ、陸獣などの頭骨をイナウで包んで守護神として祭ることがあり、こうした神をシラツキカムイと呼ぶ。キツネをシラツキカムイとする例は北海道全域に見られ、樺太には見られない。特に北海道西南部では、海狐の守りとするほか下顎骨を占いに用いる。旭川市でも占いに使う。

千歳市…イナウで包んで膳に入れ棚に祀っておく。漁の豊凶、

旅人の安否、病人の回復を（男性が）占う。占うときは下顎骨を頭に乗せ「もし魚が沢山とれるなら私の方に向けて立ってください」ととなる。歯が上を向いて落ちると吉、ひっくり返ると凶。

八雲町…漁や猟を持って行き、時化ると「船が沈むとお前も

沈んで酒もイナウももらえんぞ、がんばって岸につける」と唱える

これに対し、十勝地方の音更町、釧路地方の標茶町でも、キツネの頭骨にイナウをつけ「病気を治してくれたらもつと立派なイナウをやるから」と病氣平癒を祈願する。占いについては、北海道東北部（十勝、釧路、北見、旭川、天塩）ではイトウの頭骨を用い、キツネを用いることはない。キツネを祭ることを忌避する例は少ないが、弟子屈町屈斜路湖畔ではキツネを祭る者、頭骨で占いをする者を嫌悪する風があったという。

③ キツネの霊送り

キツネを対象とした霊送りは十勝地方（芽室町、高島町、本別町、足寄町）が最も盛大で、ほかに名寄市、千歳市、弟子屈町屈斜路、鶴居村雪裡、標茶町虹別、新ひだか町静内、同東静内、穂別町などのほか、樺太でも記録されている。

足寄町の例では、ヤナギでキツネ用の檻をつくって飼養し、12月頃にクマなどと一緒を送った。キツネはクマ神の配下だが、クマより後から送ると供物を持ち逃げするので一番先に送ってしまう。キツネ用の花矢（供物として持たせる装飾矢）は牝に対しては七〇本、牡なら六〇本用意する。イナウを編んだボンバケ（背につける装飾、ニンカリ（耳飾り）をつける。若者に花矢を六本ずつ渡して射させ、三本当たれば胴上げして祝う。祭壇には、団子六つ、土産として五つずつ刺した団子串五本と干し魚を供える。

文学例

文学中にキツネが描かれた例として、ここでは次の四例を挙げる。

① キツネのチャランケ

ある男が魚を大量に獲っていた。飢えた子を抱えた母ギツネがそのうちの一尾を取って、子供に与えた。魚が足りないことに気付いた男は、神々に抗議の祈りをし、魚を盗んだ者を探し出して罰するよう求めた。神々から追われたキツネは、その地



を去る前に男の家の裏手に現れ鳴きながら跳ねまわった。するととめどなく雨が降り、大水が出そうになった。男は魚を盗ったのがキツネの神だったと気づき、謝罪すると雨も止んだ。

(北海道南部様似町 アイヌ文化財団(2000))

②キツネがポンサマイクル・ポンオキクルミの船を襲う

ポンサマイクル・ポンオキクルミが船出すると、キツネが嵐を起こして悪戯する。ポンサマイクルに罰せられて死ぬ。

(石狩川流域 更科(1976))

③人に化けて人妻盗み

キツネの兄弟の兄が、オタストウンクルの妹を妻にしようと、人に化けて出かける。それを知った弟は邪魔をする。兄が客のふりをしてオタストウンクルの家に入ると、弟は家長に化け、干し筋子を出してもてなした。兄は干し筋子を口に入れたが、歯にはさまって取れない。後足(足)で歯の間をほじり夢中になっているうちに、ついに大きな尾を出してしまった。弟は兄を薪で散々に殴って追い出し、オタストウンクルに事の次第を夢で知らせた。

(北海道東部弟子屈町屈斜路 更科(1976))

④鍛冶屋の許嫁に化けて嫁入り

キツネが鍛冶屋の許嫁に化けて家に入るが、口が耳元までさけ、耳の後ろにキツネの毛が見えたままであった。股の間にも太い尾を

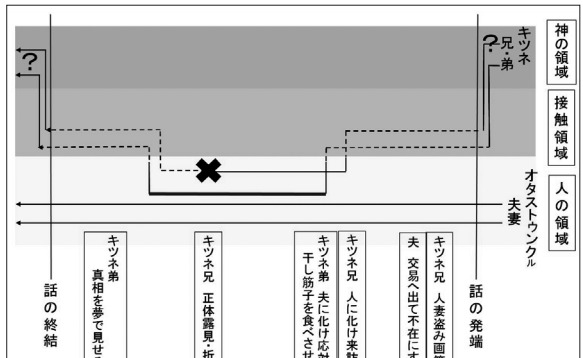
挟んでいるので鍛冶屋に笑われて逃げ出した。

(北海道北部宗谷郡様似市 更科(1976))

①のキツネは、食糧にも事欠くほど困窮しているけれども、神としての威厳は保っていることがうかがえる。それに対し、②③④は、キツネが人を害する例である。民俗例でも見たように、キツネは祭神となる一方で狡猾なイメージも伴う両義的な存在である。また、民俗例・文学例ともに他の動物に比して事例が多く、その存在感が非常に大きいと言える。

変身について見れば、①と②ではキツネは動物の姿のまま振舞っており、③と④では人に変身している。③は知里(一九七三a)その他にも樺太での類話が見られ、広い地域に分布する伝承である。足で歯をほじる仕草は、いうまでもなく四足動物が後足で身体をかく仕草からの連想であり、キツネが表面的には人の姿

図6 キツネ③人に化けて人妻盗み(人の姿——動物の姿……なりすまし——)



になりつつも、身体能力の面では本来の体にしぼられていることを暗示している。そして、夢中になるうちに大きな尾を出して正体が露見するのである。こうした展開は、異類退治の性格を強く持った話型と結びついているように見える。

#### 四・タヌキの伝承

##### 民俗例

タヌキは、民俗例においては、キツネと同じくクマの眷属として言及され、クマが冬眠する穴と一緒に入っていることも多いという。むかわ町ではタヌキを「クマの家来」と呼び、白老町では特に顔の黒いタヌキを指して「クマの飯炊き」だという。

釧路地方、北見地方、十勝地方で、オスはクマの叔父、メスはクマの叔母と呼ぶ。クマと檻を並べて飼養し、クマよりも先に食事を与えないと怒るといふ。狩の際に先にタヌキを獲ると、クマを獲る邪魔をするので一度家に帰るともいふ。

霊送りも北海道の各地で記録されている。八雲町では冬の間に獲ったタヌキの頭骨を壁にさげておき、秋に木の枝から枝に横棒を渡し、二匹ずつ縛り合わせて下げるといふ。十勝地方足寄町では、タヌキの霊送りに際しオスは一二本、メスは一四本のイナウを用意し、イナウを編んだボンバケとニンカリをつける。ほかに弟子屈町屈斜路、平取町二風谷、千歳市などでも霊送りの事例がある。多くの地方ではタヌキを先に送るが、名寄市では後から送る。

タヌキを祭神とする例は見られない。また更科（一九七六）

にはイナウで飾られたタヌキの頭骨が掲載されているが、シラツキカムイとして祭る明確な例は確認できない。

##### 文学例

タヌキが主要な役割をもって登場する話は、次の3例に類するものしか確認できない。いずれも展開はほぼ同じだが、結末が異なっている。

##### ①「神話16 小さい貉（エゾダヌキ）の自叙」

タヌキと老爺（クマ）が暮らしていた。あるとき、火の神の言伝を持った猟犬の声がした。老爺は六枚の着物を重ねて（クマの姿になって）外へ行き、人間の矢を受けた。タヌキも矢を受けて失神し、狩人の背で我に返る。

郷へ着くと、火神が神窓の外まで迎える。歓談するうちに祭りの準備ができ、多くの団子やイナウを捧げられた。老爺とそれを背負って帰り、老爺は多くの神々を招いて宴を開いた。宴の後、神々は感謝して帰り、それからはいつものように暮らしている。（北海道南部日高町平賀 久保寺（一九七七））

##### ②「神話17 戸口の神（貉）の自叙」

タヌキと老爺（クマ）が暮らしていた。あるとき、火の神の言伝を持った猟犬の声がした。老爺は六枚の着物を重ねて外へ行き、人間の矢を受けた。タヌキも矢を受けて失神し、狩人の背で我に返る。

郷へ着くと、火神が神窓の外まで迎えてくる。欲談するうち老爺が「これから我々の肉が料理されて出て来るが、決して手を付けないうように」と言った。しかし、余り美味そうで一なめした。

祭が終り、土産を背負って立ちあがった老爺は「禁を破ったので連れて行けない」という。そして戸口の守り神の役を負うように命じられ、それ以来人間の家の戸口を守ることになった。

(北海道南部平取町荷葉 久保寺(一九七七))

③タヌキと老爺(クマ)が暮らしていた。他の神々から人間の所で受けた歓待の話を聞いていた。あるとき、火の神の言伝を持った狐犬の声がした。老爺はとっておきの毛皮を着て(クマの姿になって)タヌキに留守番を命じ外へ行き、人間の矢を受けた。タヌキも狐犬にかみ殺される。

郷へ着くと、火神が神窓の外まで迎えてくる。欲談するうちに酒宴が始まり、上座の梁下から金の鉢を叩くような酒謡が、下座の梁下から銀の鉢を打つような酒謡が聞こえてきた。謡っていたのは金のなめくじ、銀のなめくじで、タヌキはそれらを口に入れ知らぬ顔をする。

タヌキは家に戻ると、なめくじを失った人間の村長がふさぎこんでいることに気付いたが、知らぬ顔をする。ある日やせた男がヨモギの槍を持って家に入って来て、タヌキを連れていったことでクマを責め、タヌキの口の端を槍で突く。タヌキは痛みのあまり口からナメクジを落とす。タヌキはひじとひざも突

かれ、傷が腐ってみじめな死に方をする。(久保寺(一九七二))

民俗例においてはクマの叔父として一定の存在感を持つが、祭壇の神やシラッキカムイとして祭られることはない。いっぽう、文学においては確認できる話型は一つのみと影が薄い。

なお、クマとともに送られることや、戸口の神として祭られるという点は、北海道北部や樺太アイヌ、ニヴフ文化におけるイヌの地位に通じる。

樺太東海岸では、イヌの頭をイナウで飾って窓に下げ、病魔除けとする。特に優秀なイヌが死んだときには、戸口の守り神として戸口に頭を祭る。これはニヴフ文化にも見られる習俗である。また、樺太西海岸では、クマ送りに際し、クマの小間使いとしてイヌを一緒に送る。

北海道北部の美幌町でも、イヌの頭を屋内に祭って病魔除けとする。イヌのことをアパチャペンキ「戸口の守護者」とも呼ぶ。

## 五. ヘビの伝承

### 民俗例

ヘビの民俗例は崇敬と畏怖・忌避の2つの感情が強く感じられる。更科(一九七七)から事例を引用する。

#### ①ヘビへの崇敬

北海道西部の日高地方・空知地方では糠塚の神(農耕神)、流行病除けの神とされ、祭壇に祭られることも多い。

日高地方では、イノカカムイとよぶヘビ形を作つて儀礼を行なう。女性の体調がすぐれないとヘビの形をつくり、火の神に祈つてからそれで病人をさする。ヘビの神が病気の神を追い出し、代わりにその者の守護神となる。病者は快癒後は巫術・イムをするようになる。

ヘビが入った温泉に入るとよく効く。日高地方では狩の途中、性のいいアオダイシヨウを見ると願を掛ける。その後獲物を授かると、アオダイシヨウを見た場所にイナウと獲物の肉を供える。

空知地方では、ヘビが絡まり合つて交尾しているのを見たら人に言わずにおけば幸運になる。

## ②ヘビへの畏怖

ヘビが穴に入るところを見ると良くないことがある。見てしまったときはすぐにそのヘビを殺してヨモギを6か所刺す。

ヘビを殺すと祟りがある。もしも殺してしまつたら、イナウを供えて謝罪する。千歳市、新冠町、美幌町ではクルミ、新ひだか町静内や阿寒町ではイヌエンジュ、日高町富川ではニワトコ、虻田町や沙流流域ではヤナギを用いてイナウを作る。むかわ町穂別ではヘビの形を作り、ヘビの好きなものを供えて謝罪する。

夏場に口琴を鳴らすのはよくない。ヘビが集まつてくる。口笛を吹くとヘビが来る。

トッコニヤオヤウなど、直接的にヘビを指す言葉を忌避する。代りにタンネカムイ(長い神)、チホマブ(恐ろしい者)等と呼ぶ。

## 文学例

### ①ヘビが地上にすむようになった由来

ヘビはもともと天界で人間と同じ姿で同じような生活をしてきたが、性質が凶悪だった。人間界が作られ、神々が地上に降下するとき、ヘビは火神と一緒に降りたがった。雷に乗つて一緒に落ちると、地面に大穴が空きそこに住むようになった。

(北海道南部新ひだか町静内 更科 (1977))

### ②ヘビが農耕神となった由来

ヘビは地上に降りるにあたり、農耕を助けスズメやネズミを退治する約束をした。(北海道南部新ひだか町静内 更科 (1977))

### ③ヘビが飢饉を救つた話

人間界が飢饉になつたので、クマ神がシカとサケの神に交渉しにいった。しかし、人間たちが不敬な態度を取る所以食料を与えることはできないと言われ交渉はうまくいかなかった。帰り道に、大きな家があり魚が沢山干してあつた。クマ神も腹を空かせていたので、魚を分けてもらおうと家の中に入り、わけを話した。立派な神が膳一杯に食物を出してくれた。礼を言つて食べようとすると、膳一杯に入っていたのはヘビの死骸だった。クマ神は膳を投げて逃げ出した。その神はシカ神の所へ行き、シカを降ろす様に言つた。シカ神が相手にしないと、巨大なヘビになり「それならお前を食つてやる」と言うと、シカ神

は慌てて庫から編み袋を出し、シカの骨を撒くと人間界にシカが満ちた。ヘビ神はサケ神のところでも同じように脅したので、人間界に食が満ちた。(北海道南部新ひだか町静内 更科(1977))

ヘビ神は文学の事例も豊富で、それらを見ると民俗例と同様に強い崇敬と畏怖が入り混じった感情が読み取れる。事例③では、人間界を救う偉業が語られながらも、どこか不気味な存在として描かれている。クマ神がヘビを恐れるというモチーフもしばしば見られ、日常の習俗でも同様の観念がみられる(クマに遭遇した場合には、荷縄を投げつけると良いという。荷縄がヘビに見えて、クマの意識がそれたスキに逃げるのである)。

## 六・考察

本州ではキツネとタヌキは対の様に考えられ、事実、中村禎里は本州の説話においてキツネとタヌキに共通する話型が多数ある事を紹介している。また近世後期にはキツネに狡猾・女性的というイメージが、タヌキには愚鈍・男性的イメージが定着したことを指摘し、本州の妖狐譚は中国の流れをくむものであると述べた。アイヌの事例においても、民俗例ではキツネとタヌキがともにクマの眷属と見なされており、その点では対をなしていると言える。キツネが狡猾、タヌキが愚鈍なイメージで語られる点も本州と共通している。

祭壇に恒常的に祭られる神、あるいはシラツキカムイとして

祭る事例については、キツネの事例が豊富であるのに対し、タヌキの例は見当たらない。文学においてもタヌキの事例はたいへん少なく、総体としてタヌキの存在感はキツネに比べれば小さいと言わざるを得ない。

いっぽう、ヘビはキツネと同じく恒常的な祭神ともなり、民俗例も文学例も豊富である。キツネもヘビも「祟り」や吉凶と関連した多彩な習俗が見られ、恐れるにせよ敬うにせよ、その存在を人々が強く意識してきたと言える。しかしながら、変身という点に注目すれば、両者の違いも見えてくる。ヘビの変身譚はキツネに比して多いとはいえず、また第3の変身に当たる事例は、やはりキツネの場合に際立つて多い。

第1の変身や第3の変身に当たる例は、ニヴフの文学にも見られる。服部(二九五六)からニヴフのキツネ変身譚を三篇引用する。

### ①老人に化けた狐

老人が用事で出かけた帰りに座って一服していると、赤キツネが海へ行くのが見えた。見ていると海へ頭を突つ込み、空に向かって鳴くことを三度繰り返すうち、老人そっくりに化けた。そして老人になりすまして家に帰り、妻と茶を飲んでいる。老人がイヌをけしかけて殺すと、大きな赤キツネになった。

### ②妻をだました黒狐

ある村の男が、三日後に帰ると言って出かけた。ところが、二日後に妻が外に出ると、夫の櫓が戻って来た。妻は変だと思

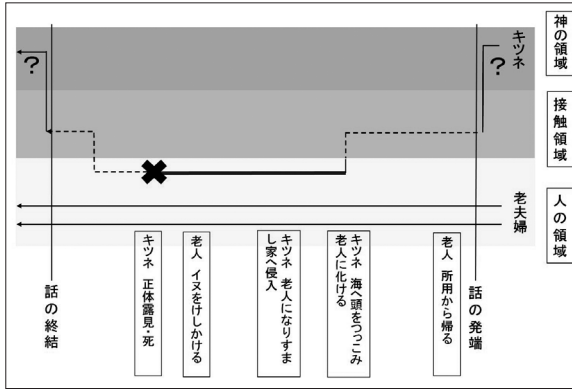
いながら食事の用意をしていると、また夫と同じ櫛が戻ってきた。妻はこちらが本物らしいと思って、後から来た夫に事態を知らせた。夫は先頭犬を家に入れる様に言い、中に入って見ると黒キツネがかみ殺されていた。

③ 樺太に狐がいるわけ

ある村の美しい娘を、キツネの皮をたくさん持った男たちが娶った。娘の家の近くに泊まった。娘が目を覚ますと男たちはみなキツネだった。娘は抜け出して助けを呼びに行った。村人たちは棍棒でキツネを叩き殺した。その時逃れたキツネがいたので、今でもキツネがいる。

ニヅフもクマ送りの儀礼を持ち、その背景にある観念も共通している。たと

図7 ニヅフのキツネ伝承① 老人に化けるキツネ  
(人の姿——動物の姿……なりすまし——)



えば、クマは森林の中に自分たちの世界を持ち、ここでは人と同じ姿をして暮らしている。クマたちは人間のつくる食べ物などを欲しており、ときどき毛皮を着てクマの姿になり、人間の所へやってくるといふ。さらに、クレイノヴィチによれば、クマの世界には人間の世界と同数の氏族があり、人間とクマの交換は対になる氏族どうしの間で行われる、そして自分達が交換に出した品(儀礼の供物)には絶対に手を付けてはならないという。この点は、タヌキの神謡において、自分の肉を食べたタヌキがなぜ罰せられたのかという問題を考える手掛かりになる。アイヌにおいても、人と動物が交換に出した品に自ら手を付けることはタブー視されたのだろう。

このようにニヅフとアイヌには共通の動物観があり、それと第3の変身はやはり衝突するものであるはずだ。中村禎里は、キツネから人への変身譚がアジアからヨーロッパにかけて広く見られるとしている。アイヌやニヅフの妖狐譚は、こうした広域に伝播した妖狐譚から、キツネが獣の姿を露呈するモチーフを取り込んだと考えるのが自然ではないだろうか。

七. 結語

本稿では、アイヌ口承文芸に現れる第3の変身のうち、特に霊送りなどの民俗例の背景となる動物観と矛盾する事例を、異類婚譚を中心に検討した。第3の変身のうち、特に動物の姿を「本来の姿」であるかのように描く話型は、キツネ退治の伝承に

多く見られた。第1の変身については衣服の着用という明確な説明があるのに比べ、第3の変身については、あらかじめ原理を説明した例が見られない(その点、ニヴフの妖狐譚には、キツネが術を使うらしい場面が描かれているのだが)。こうした点からも、第3の変身は霊送りの観念とは別個に発生してきたことが感じられる。

人間に変身して近づいてくる異類は、婚姻を目的としていることが多い。これを退治する話には、動物との婚姻に対する拒否感情がうかがえる。いっぽう、アイヌやニヴフには、人間が動物の世界に入り込んだり、また動物が人間の伴侶として添い遂げ、幸福になる話も見られるが、そうした話型にはキツネは現れない。また本稿では事例を示すにとどめたが、同じく第3の変身が見られる狐児養育譚にキツネが表れないことも特徴的である。

キツネの伝承がこのような傾向を持つ理由として、本稿での検討を経て次のような見通しを立てている。まず、動物が特別に説明なく人に変身する、周囲の文化によく見られる話型がアイヌにも存在した。そこへ、周囲の文化におけるキツネのイメージや妖狐譚が伝播し、特にキツネが正体を露見するモチーフが取り込まれた。異類の変身をいかにして見抜くか、そして正体が劇的に暴かれる瞬間のドラマ性が語り手・聞き手に喜ばれ、広く伝えられて来たものではなからうか。もつとも、現状では印象論に過ぎないので、伝播の経路や時期を考えるためにも、更に内外の事例を収集する必要がある。また、ここで十分に扱え

なかつた狐児養育譚や古物変身譚も、機会を改めて検討したい。

本稿は二〇一七年六月四日に行われた日本口承文学学会研究大会において発表した内容に修正を加えたものである。発表をお聞きいただいた会員諸氏からのご助言により、不十分ながらも内容を改めることができた。先攻研究などについてご教示いただいた高木史人先生、コメントやご助言をいただいた三浦祐之先生はじめとする皆様に対し心より御礼を申し上げます。

## 注

- (1) 後述するように、アイヌやニヴフには、人が動物の姿になって動物の世界へ嫁ぐ話型も存在する。日本やヨーロッパには見られない話型があるという点では、より人と動物の距離が近いともいえる。
- (2) 動物神に限らず、火神や太陽神が発する熱、植物神が与える繊維など、自然神からの恩恵はいずれも着物の比喻によって語られることが多い。
- (3) アイヌ民族博物館による要約を、紙幅の関係から更に要約した。
- (4) 動物神には、カラス、クマ、ザリガニなどそれぞれの種の中に一族を統括する者がいる。これに対し、植物神は種の統括者の上に更に植物界全体を統括する存在が想定されていることがある。
- (5) クマに殺された者は「クマの世界へ引き込まれた」、水死者は「水の世界へ引き込まれた」等、変死の際に、死者の靈魂

はそれに関与した神の世界へ引き込まれると考える。疱瘡などの流行病によって死んだ者の靈魂は、疱瘡神に連れられて世界をさまようという伝承もこの一種である。第2の変身をもなう話型には、こうした觀念との関わりを感じる。

(6) 北海道南部沙流川流域には、幼児がケナシウナラペ(木原の婆)という魔物にさらわれ、トキット(コノハズク)に変えられた伝承がある。

(7) 千歳市には、老いた両親に孝行をしなかった息子がヨタカに変えられた伝承がある。また、アイヌ民族博物館収蔵資料の「アカケラになった女の子」は、怠け者の孫娘が、祖母に孝行をしないまま死なせた罰としてアカケラに変えられる話である。

(8) この型はアイヌの事例ではあまり見られず、大祖説話などがある程度である。例えば千徳(一九二九)や、稲田・小澤(一九八九) *POA* など。また、Ohnuki(一九六九)に収められた樺太西海岸ライチシの散文説話には、シャチが娘を背に乗せて海へ連れていく例がある。娘が両親と再会するときは、娘はシャチの背に乗って赤ん坊を抱いているというように、人のまま動物の伴侶となっているように見える。

(9) 例えば北海道南部新ひだか町静内の神謡「村造り神の妹に食べられた好色カニの神」(アイヌ民族博物館所蔵音声資料 34101B)では、カニが、その姿のまま女性を娶りに行って撃退されている。この女性は村造り神 *Kotankakanny* の妹だが、村造り神は他の神と違って常に人間の姿をしており、後述するカケスの神謡と同じく構造としては人と動物の婚姻

譚になっている。荻原(一九九六)に挙げられた、シャチ神が人文神の妹に惚れた話もこれと同様で、シャチ神は人文神の妹を訪ねたが、彼女が宝物に変身していたために見つけることができずにあきらめている。

(10) 「りくんべつの翁」所収 (pp.400-405)。

(11) 石狩川流域の語り手が語った物語を集めた「キナラブック ユーカラ集」にも、これとほぼ同じ散文説話が収められている。

(12) 本州に比してタヌキの伝承が少ない理由として、記録から漏れた可能性のほか、タヌキの生息域が北海道を北限としていることの影響も考えられるだろう。タヌキがいない樺太では、イヌがその地位にある。さらに、アイヌの伝承ではクマが頻繁に登場し、男性的かつしばしば愚鈍な役柄を演じている。本州の伝承であればタヌキが表れるような場面に、アイヌの文学ではクマが表れているとも考えられる。

#### 参考文献

(公財) アイヌ文化振興・研究推進機構(アイヌ文化財団)

二〇〇〇『第3回 アイヌ語弁論大会報告書』アイヌ文化振興・研究推進機構。

稲田浩二・小澤俊夫

一九八九『日本昔話通観第1巻 北海道(アイヌ民族)』同朋舎出版。

大貫恵美子(OHNUKI-Terney,Emiko)

一九六九“Sakhalin Ainu Folklore” ANTHROPOLOGICAL



萩原眞子

一九九六『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリ  
ン地域の神話・伝承—』草風館。

二〇一六「動物カムイたちの「許されぬ恋」—神謡再考」  
『ユーラシア言語文化論集』第18号、千葉大学ユーラシア言  
語文化論講座。

小澤俊夫

一九九四『昔話のコスモロジー』講談社。

加藤九祥

一九八六『北東アジア民族学史の研究』恒文社。

久保寺逸彦

一九七二『アイヌの昔話』三弥井書店。

一九七七『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店。

クレイノヴィチ, E. A.

一九九三(一九七三)『サハリン・アムール民族誌—ニヴフ  
族の生活と世界観』榎本哲訳法政大学出版局。

更科源蔵・更科光

一九七六『コタン生物記Ⅱ 野獣・海獣・魚族篇』法政大学  
出版局。

一九七七『コタン生物記Ⅲ 野鳥・水鳥・昆虫篇』法政大学  
出版局。

千徳太郎治

一九二九『樺太アイヌ叢話』市光堂。

知里真志保

一九七三 a (一九四四)『樺太アイヌの説話(一)』知里眞  
志保著作集Ⅰ 平凡社。

一九七三 b (一九四八)『りくんべつの翁』知里眞志保著作  
集Ⅰ 平凡社。

一九七六(一九五三・一九六二)『分類アイヌ語辞典 植物  
篇・動物篇』知里眞志保著作集 別巻Ⅰ 平凡社。

藤村久和・平川善祥・山田悟郎

一九七三 a 『民族調査報告書 資料編Ⅰ』北海道開拓記念館。

一九七三 b 『民族調査報告書 資料編Ⅱ』北海道開拓記念館。

中川裕

一九九七『アイヌの物語世界』平凡社。

中村禎里

二〇〇六(一九八四)『日本人の動物観』ビイニング・ネット・  
プレス。

中村とも子

二〇一〇『日本の異類婚姻譚における人と動物のあいだの距  
離—「変身」の視点から』『口承文芸研究』第33号、日本口  
承文芸学会。

服部健

一九五六『ギリヤーク 民話と習俗』楡書房。

(きたはら・じろうた)北海道大学アイヌ・先住民研究センター